幼児の教育　第102巻　第12号　平成15年12月1日（毎月1回発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可　ISSN0289-0836

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

12

第102巻　第12号　日本幼稚園協会

世界に学ぼう！

デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカに見る子育て環境

子育て支援

最新刊

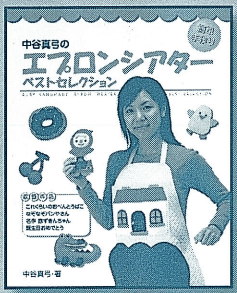
世界の子育て環境がわかる。

子育て支援に関して、世界には優れた施策や市民活動を展開している国々が存在します。本書では、デンマーク・スウェーデン・フランス・ニュージーランド・カナダ・アメリカの6か国を取り上げて、社会背景とともに育児理念・法制度・保育サービスの種類などを紹介。コミックやコラム、各種データも盛り込み、これからの子育て支援、社会のあり方を考えるうえで役立つ情報満載の一冊です。

本書の内容（目次より抜粋）

- ●デンマーク……親の参加が義務づけられる運営協議会／普遍主義とノーマライゼーションを理念に
- ●スウェーデン……世界一の女性就業率を支える保育サービス／1歳までは育児に専念
- ●フランス……卓越した家族給付と保育・教育システム／2時間の昼食とふんだんな休暇
- ●ニュージーランド…疑似バウチャー制度による保育支援／伝統的な暮らしぶりと増加する離婚
- ●カナダ……市民活動に支えられる子育て支援／厳しい生活状況と高い女性の就労率
- ●アメリカ……保育行政の遅れを補う民間の体制／保守的な育児観と軽視される保育

汐見稔幸編著　大枝桂子構成・文　A5判　208頁　定価：本体1,800円＋税



簡単手作り

最新刊

中谷真弓の

エプロンシアター

ベストセレクション

ポケットから生まれる、とっておきの物語！

エプロンシアターの考案者、中谷真弓先生によるベストセレクション。「名作赤ずきんちゃん」「これくらいのおべんとうばこ」「なぞなぞパンやさん」「誕生日おめでとう」を収録。エプロン・人形の作り方の基本、原寸大型紙付きで、すぐできる！

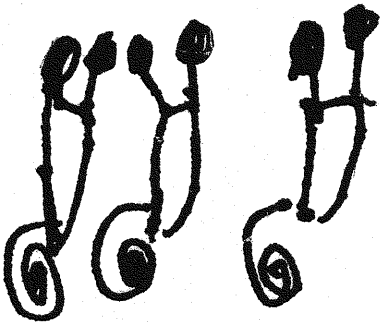
中谷真弓著　AB判　80頁　本文（カラー40頁／2色40頁）
定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第102巻　第12号



幼児の教育　目次

――第一〇二巻　第十二号――

巻頭言　保育における進歩とは……金田　利子…（4）

乳幼児期の「食」を考える(1)……小川　清実…（10）

ポジティブサポートの世界(5)
「現実」を「将来」に繋げていくということ、姿勢、行為、意味
村田　愛…（15）

障碍をもつ幼児の保育(17)　―この子と出会ったとき―
ちょっと立ち止まって……津守　真・津守　房江…（24）

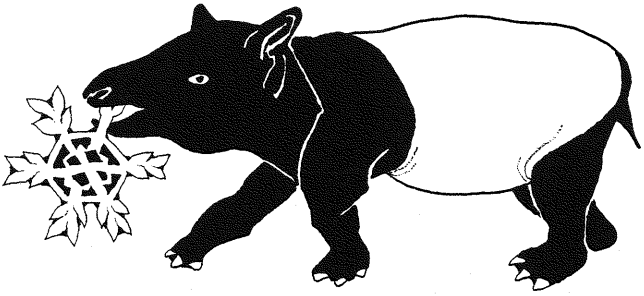
ロンドンの子どもたち―プレイグループでの半日―……清原　規子…（29）

ある日……（36）

© 2003
日本幼稚園協会

保育を積み重ねること
―堀合文子先生四歳児の保育ビデオから― ……関口はつ江…（38）
保育実習生として成長していく時に大切なこと ……梅田　優子…（46）
手づくり活動の楽しさすばらしさ(9)
なんでも車にしてみよう ……浜本　昌宏…（53）
恐竜の作り方 ……高橋　陽子…（54）
幼児の教育第一〇二巻（平成十五年）総目録 ……（61）

表紙絵／南塚　直子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「雪の結晶を食べる」
編集委員／田代　和美・高橋　陽子・佐藤　寛子
編集部／仲　明子



巻頭言

保育における進歩とは

金田　利子

かの土地に見合いし住まいまもり来し　アフガンの知恵胸突くは何

人類の暮らしの原点ここに見ゆ　内から文化壊す日本か

右の二首は、最近「アフガニスタンの住まいと文化遺産」と題する講演（西川幸治氏）を聴く機会があったが、その際の感想を筆者が即興的に詠んだものである。

「進歩」とは何かが問われて久しい。日本もそうであるが、最近のおびただしい自然や文化を破壊して進める開発とそれをよしとする「進歩主義」への警鐘である。

同様の視点が人間の発達においても課題になってきている。右肩上がりの知的発達

の高次化のみが追い求められることへの「進歩主義的」人間観の問い直しである。しかし、もしあらゆる進歩を否定するならば、たとえば電気も認知の発達も不要になり、極端に言えば原始に帰ることがもっともよいことになる。

保育は、まさしくこうした原点とも言える人間観・歴史観と切り離すことは出来ない。人間発達を専門とする筆者にとっても避けて通ることの出来ない課題である。

ここでは、この課題をグリム童話の一つでイギリスの昔話である『三びきのこぶた』を基に考えてみたい。童話の再話は、国によって、また国の中でも翻訳者によってかなり違ったものになっている。学生たちにどんな物語なのかを問うと原作とはかなり違う話が伝わっていることがわかる。それは、三匹は同時に自立のために家を出て自分の家を建てるのだが、怠け者の長兄は最も楽に建てられそうな藁を、次兄は次に楽そうな木を、いつもは兄たちにいじめられているが勤勉で賢い弟は煉瓦を選んだ。結果、兄たちの家はオオカミに吹き飛ばされるが、弟の家は頑丈でオオカミにはびくともしないというもので、その先も誰も傷つかず謝罪で助かることになっている。

しかし、原作（福音館本は直訳）には、歴史観がはいっており、三匹は決して同時に家を出るようにはなっていないし、それぞれが自分の意志で材料を選んだとはなっておらず、たまたま出会った人の持っていた資材をもらって家を建てたとなっている。そして、はじめの藁と次の木の二軒は吹き飛ばされこぶたは二匹ともはオオカミ

に食べられてしまい、最後の煉瓦の家はオオカミは如何ともしがたく、あの手この手で誘い出すが、こぶたの英知でオオカミが負け最後には逆にオオカミを食べてしまう。

前者の再話への課題意識の欠如に関する批判はすでになされているが、ここでは、先の課題に戻り歴史観の点についてのみ取り上げる。すなわち、決して同時に家を出てはおらず、長兄が藁で建てたのも三番目が煉瓦で建てたのも能力や性格の結果ではなく、たまたま出会ったのがそれを持っている人であり、その時代だからだという歴史性が明確に位置付いているという点についてである。

人間の発達を個体発達としてだけみると、大人は子どもより発達した存在（＝先輩）であるが、系統発達から将来を見通すとき、子ども、それも出来るだけ後から生まれ幼いものほどより大きく発達する可能性を、社会が人間中心に進んでいくならば、持っているという意味で、アナロジックに言えば系統発達上の「先輩」になり得る。この、パラドックスすなわち後から生まれたものほど、発展していける可能性について説明するために、筆者は、『三びきのこぶた』の歴史的描写を活用してきた。複写にしても『ガリ版（藁）→青焼き（木）→ゼロックス（煉瓦）』と、通信にしても「郵便のみ→ファックスも→Eメールも」と「発展」し、今日においても、後から生まれたものの方が活用を間違えなければより人間的な資質を発達させる条件が拡大してきている。中年と若者を今の時点で比べれば、中年の方が先輩であるが、中年が

二十歳の時点を思い起こせば今の青年の方が「先輩」だと語るときにである。

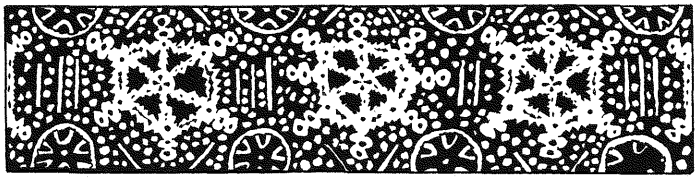
もろちん「進歩」には、その陰にもっと大きな落とし穴がある（オオカミが潜んでいる）ことを同時にとり入れる。すなわち、プロセスを見えにくくしており、そのことは、一旦電気が止まれば機能を麻痺させるし、黄粉と節分の時の炒り豆の関係を知らず安倍川餅を食べるように、原料も製造法も知らずにものを食べているために「味わう」といってもその内容が貧しくなるというように、人生の内的な豊かさの欠如をもたらす。また、手足を使わず結果が得られるため、成長・発達途上の子どもには保育において遊びの中で右記のような活動を保障しないと発達を阻害することにも繋がる。総じて言うと、三匹目のこぶたの時代においては煉瓦があった、が同時に、英知を働かせオオカミと闘ったからこそ生き残ることが出来た。進歩も否定はできないが、同時に常に新たなオオカミの出現と闘っていく必要があるということになる。

一方、辻真一氏は『スロー・イズ・ビューティフル』（平凡社）の中で、同じ『三匹の子豚』に触れ、「三匹のそれぞれが建てる家、藁の家、木の家、石の家（石は原作ではブリック＝煉瓦：筆者注）。結局頑丈で安全な石の家を造った豚が利口だという他愛のない話だが、ここに僕はほとんど悪意にも似た西洋中心思想の思惑を感じてしまう。……二十世紀後半の開発イデオロギーにうってつけの寓話だ。……今でも幼稚園で幼い子どもたちに『三匹の子豚』の劇をやらせている。そしてコンクリートを

崇拝すること、藁と木と紙と土の家に住んだ祖先を愚弄することを教えている」と。そして、「『三匹の子豚』から『空とぶ豚』へ。ぼくたちはストーリーを思いっきりひっくり返してやらなければならない。長い長い年月の中で大地によって育まれ、文化によって形づくられた〝スロー・ホーム〟への物語へと」と。（「空飛ぶ豚」とはオーストラリア南部の藁で出来ているB&B（朝食付きの宿）のファンキーな名前：辻氏による）。

確かに、先にも「進歩」の問題点について述べたように、藁から木へ、木から煉瓦へと開発していくことを手放しでよしとは思えない。しかし、『三びきのこぶた』の思想は、西欧の近代主義を教えようとしているとのみは捉えられない。もし、三匹が同時に家を出てそれぞれの意志で材料を選んだのであれば、辻氏の言うように、「安全で頑丈な家をつくった豚が利口だという他愛もない話」ということになる。そして、先に挙げた日本に多く出回っている原作に忠実でない再話で言えば、まさしくこのようなことを教えることになりかねない。原作の主張は、その豚（人間）がどの時代に生まれたかは個人の力ではなく、これだけは歴史的に決められてしまっている、その歴史的条件を、生き抜く力に変えていくところに知恵が必要なのではないかということであり、奥深い話でこそあれ、決して「他愛のない話」というものではない。

しかし、童話一つにしても、無意識的に扱うことにより単純に進歩主義を教え込ん



でいる結果になったり、歴史的な視点に目覚める契機になったりと、大きな哲学的視点を内包していることに、保育においても、敏感でなければならない。

必要なことは、歴史的な進歩と、もしかしたら陥るかも知れない進歩主義の関係を考えて見ることではないか。大切なのは、進歩と進歩主義の区別ではないか。進歩は全面否定はできない。問題なのは進歩こそ第一と見る進歩主義ではないだろうか。

辻氏の、そこへひっくり返したい「空とぶ豚」の「藁の家」は、「藁を圧縮してつくった直方体のブロックを積み上げ、その表面を土で固めてできたもの」だという。それは材料が藁なのであるが、エコロジー建築家たちの進歩した技術がもたらしたものでもあり、「進歩主義」を批判した、しかしまさに「進歩した藁の家」だと言えよう。そしてそれこそが大切なのだと思う。長い人類の文化の歴史を尊敬し、高齢者の知恵から、目の前のものの作られるプロセスを知り、古いものの中に新しいものを新しいものの中に古いものをとりいれ、民主主義の進歩と科学の進歩が相伴って、真の人間の文化を進歩させていく方向を目指していくことが求められる。それはまさに、後から生まれたものが「先輩」になり得る進歩の道に繋がるものと考える。

人類の真の進歩を考えるとき、乳幼児時代に手足、頭や体全体を使って先人の足跡を遊びの中に取り入れることがどんなに大切かが見えてくるのではないかと思う。

（静岡大学）

乳幼児期の「食」を考える(1)

小川　清実

はじめに

二〇〇三年六月十九日に、第一回食を通じた子どもの健全育成（―いわゆる「食育」の視点から―）のあり方に関する検討会が、厚生労働省雇用均等・児童家庭局主催で開催された。その後、第二回は七月二十九日に行われ、第三回の日程も決まっている。この検討会は公開になっているので、すでにご存知の方もいらっしゃると思うが、改めてこの検討会の目的などを紹介して、国が考えていることと各地ですでに行われている実践と、今、私たちが保育という実践のなかで直面している「食」をめぐる課題について考えたい。

検討会の目的

厚生労働省雇用均等・児童家庭局が述べる目的は次のようである。

「近年、子どもの食をめぐっては、発育・発達の重要な時期にありながら、栄養素摂取の偏り、朝食の欠食、小児期における肥満の増加、思春期におけるやせの増加など、問題は多様化、深刻化し、生涯にわたる健康への影響が懸念されている。

また、親の世代においても食事づくりに関する必要な知識や技術を十分有していないとの報告がみられ、親子のコミュニケーションの場となる食卓において家族そろって食事をする機会も減少している状況にある。

これらの問題に対応するため、食を通じて、親子や家族の関わり、仲間や地域との関わりを深め、子どもの健やかな心と身体の発達を促すことをねらいとし、家庭や社会の中で、子ども一人ひとりの〝食べる力〟を豊かに育むための支援づくりを進める必要がある。

このため、雇用均等・児童家庭局長が参集する検討会を開催し、食を通じた子どもの健全育成のあり方について検討を行うこととする。」

さらに、検討課題が二点、挙がっている。

「(1)子どもの発達段階に応じた『食を通じた子どもの健全育成』のねらいと育むべき〝食べる力〟について

(2)子ども一人ひとりの〝食べる力〟を育んでいくための具体的な支援方策について」

検討会は、十五名の委員と厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課の職員達で行われる。

私はこの検討会のための作業班的な意味合いを持つと思われる研究班のメンバーになったお蔭で、この検討会を傍聴し、具体的に保育所での「食」について考える機会を与えられることとなった。

各自治体の取り組み

すでにいくつかの自治体では乳幼児期の子どものための「食育」に関する取り組みはある。私にとっては

「食育」という聞き慣れない言葉であるが、すでに厚生労働省雇用均等・児童家庭局では「食を通じた子どもの健全育成」のことを「いわゆる食育」としているので、ここからは食育として（「　」なしで）述べていくことにする。

二〇〇〇年に茨城県は「保育所における食指導書作成委員会」を立ち上げた。その報告書は『子どもの心とからだを育む―保育所からの食育実践―』（二〇〇〇年）である。さらに東京都多摩保健所が「21世紀を担う子どもたちの食育ガイドライン」に取り組み、『21世紀を担う子どもたちの食育ガイドライン～保育園・幼稚園の園児への食育のために～』（二〇〇三年二月）としてまとめられた。同じく神奈川県大和保健福祉事務所が「げんきっ子・食育プラン」に取り組んで、『げんきっ子・食育プラン―幼児の食育推進のために―』（平成十四年度地域食生活対策推進協議会報告書、二〇〇三年三月）にまとめた。これらの一つ一つの細かな紹介は省くが、特定の地域ではあるが、幼い子どものために、今、まさに動き始めたというところである。保健所を中心としたものだけではなく、東京都社会福祉協議会保育部会保育士会給食部会では『保育園の食事マニュアル№1　食育～食を育む～』（二〇〇三年三月）を発行している。この会は栄養士・調理師及び調理員の方々で構成されている。実際に保育園で子どもの食事やおやつ作りに関わる方々が改めて食育を考えている。

保育所における食育

食育を保育所ではどのように実践していくのが望ましいのだろうか。食育が保育所保育の特別なプログラムになるのが望ましいことではないのは言うまでもない。食育も保育所保育の基本である保育所保育の考え方を踏襲していきたい。すなわち保育所保育指針の第一章総則の前文で謳われているように「保育所におけ

る保育は、ここに入所する乳幼児の最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしいものでなければならない」。そして引き続き述べられている「十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を適切に満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること」、「健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと」を始めとする保育の目標などに沿って食育プログラムを構築していくことが重要である。

これまで保育所の「食」の中の食事作りのほとんどが栄養士や調理員の領域であり、実際に乳幼児が食べる活動は保育士が担うという、「食」をめぐって二つの異なる役割が働いていた。家庭ならば食事作りをする人は、子どもが実際に食事をする活動に携わるのが普通である。家庭では、「食」をめぐって一つの流れであるのに、保育所では「食」をめぐり、二つの流れがあることが課題なのではないか、保育所における食育を保育士、栄養士、調理師、調理員が連携して、「乳幼児の最善の利益」を追求することが保育所の食育の目的となると考える。保育士の役割が子どもの保育だけではなく、保護者に対する指導も担うようになること、さらに地域の保育相談にも従事することになるので、食育をめぐっての課題は非常に大きいといえる。

保護者への支援

初めての子どもを持った母親は様々な不安を抱える。中でも「食」に関する事項は出産直後から始まる。母乳育児が最高であると信じた母親が、十分に母

乳が出ない場合には、人工栄養を与えることに罪悪感を感じたり、自分自身の体に自信が無くなり、育児不安を引き起こしたりする。子どもが育つときに大切なのは親子の親密なコミュニケーションであるはずなのに、授乳がストレスを引き起こす原因になることがある。公民館主催の母親を対象とした講座では「食」に関わることで悩んでいる母親が必ず存在する。子どもの飲みが悪く、順調に体重が増加しないことで母親自身が死にたいと思っていたり、座って、落ち着いて食事ができないのでいつも子どもを追い掛け回して、口の中に食物を入れていることに悩んでいる母親などと出会ってきた。また、保育所巡回保育発達相談員からは、保育相談に「食」に関わる事項が多いことに驚きを感じているという報告を受けた。これは、保育という営みの中に、すでに人々は「食」に関する事項を取りいれて考えているということであるといえよう。

終わりに

保育所における食育プログラムを構築していく際には子どもを通して親への影響を十分に考慮し、保育士が一人一人の子どもを理解し、一人一人の子どもの欲求を満足させてあげることができるように、子どもの親達も自分の子どもを理解し、関わることができるようにしていきたい。

さらに保育所の食育プログラムは、保育所で完結されるものではないことを強調したい。あくまでも基礎をつくるのであり、小中学校に繋がっていくものであることが大切である。そして思春期から大人へ、老人へと生涯を通して、「食」について考えて実践していくことができる基礎を作る事が大切である。

（聖心女子大学）

ポジティブサポートの世界(5)

「現実」を「将来」に繋げていくということ、姿勢、行為、意味

村田　愛

ポジティブサポートは固定観念や先入観に縛られることなく、「その人」はどんな人かを考えながら、「その人の全体像」を捉え直し、「その人らしさ」の生かされる将来のヴィジョンを考えていきます。

ここでは、人の全体像を捉え直すことの重要性、そしてその土台となるポジティブサポートのセッションの継続の意味、そして、現実を将来に繋げていく積極的な姿勢とはどういうものかを示す為に〈ジュン君の場合〉を紹介します。

ジュン君は養護学校中学部の三年生です。ポジティブ

サポートのセッションを小学部五年生の時から学期に一度のペースで継続しています。参加者は主に本人、御家族、小学部時代の担任の先生や実習生、そして、長年関わっている造形の先生や音楽の専門家です。ジュン君の現在の養護学校の先生にも毎回セッションのお知らせをしているのですが、お忙しいらしく一度参加頂いて以来継続的には参加されていません。

この夏、ジュン君は家族から離れてアメリカで二週間、キャンプ生活を体験しました。このところ、ポジティブサポートのセッションメンバーは、ジュン君が新しいチャレンジを待ち望んでいるように感じ、御両親はキャンプ参加をジュン君に提案しました。そしてジュン君はその提案を聞いて、嬉しそうにそのチャンスに飛びつきました。しかし、養護学校の先生には、キャンプ参加の意味がわからないと言われたのです。

ポジティブサポートをすることで見えてくるジュン君と、学校の先生の見るジュン君。このズレは何を意味するのでしょう。ジュン君という人の捉え方の違い、ジュン君の現在、そして現在からの展開に関する考え方の違いの表れと私は考えます。

ジュン君

ジュン君は、年齢のわりには小柄で、笑顔のさわやかな、人に好感を持たれる素敵な中学三年生です。人と関わり、やりとりすることが好きです。相手を真似ることで表現力を掴んできたと思います。幼児期にアメリカで生活していたからか、英語の音や文字の形に興味を示し、映画、音楽、絵本なども英語のものを好んでいます。複数の単語を使って気持ちを表現するわけではありませんが、身体の動き／行動や表現で表現力豊かにその時その時の気持ちを相手に伝えようとします。まわりを良くみてその場に応じて行動に移すこともでき、協調性が高いと言えるでしょう。彼は穏やかな人で、平和主義です。人に否定的な形で表現することもされることも苦

手で、なんでもお断りするのが苦手な数年前の彼の様子が、私は心配になる程でした。野球のボールなどをコントロール良く投げるのが得意です。そして、芸術的活動やきれいなものや美しい風景にも高い関心を示します。音楽などでもリズムにのせて身体を動かすことも大好きです。

ジュン君の生活（守られた世界）

ジュン君に限らず公立の養護学校へ通う生徒の多くの場合、学校へはスクールバスで通い、スクールバスの停留所と家の間の行き来は御両親のどちらかが一緒です。自ずと、行動範囲・人間関係は、同年齢に比べて限られたものになってしまいます。

ジュン君が生活の中でほぼ常に誰かの管理下にあることが御家族の気がかりになってきました。常に誰かの管理下にあるということは、ジュン君にとっては不自然ではないか、自立していこうとするジュン君の成長にどのような影響を及ぼすのかを考えているようでした。

子どもは、親が知らない時間／世界を持つことを、大人っぽさ／自立の象徴の様に感じることもあります。もう自分は守られるだけの存在ではなく、より多く自分の判断で何かを決定し、そこで結果として伴う責任をも意識することで育てられることもあります。しかし、ジュン君にはそれらの冒険をする機会が限られているのです。

冒険する機会／チャンス

ジュン君の六年生の頃のポジティブサポートのセッションでは、「一人でどこかへ出かけたいのではないか」と、ジュン君の自立心の芽生えを表すような発言が多く出ていました。そして、セッションを継続するにしたがってジュン君の自立心の強さが現れ／表れ、さらに中

学二年生の頃には「自分の自由意志で行動したいのではないか」と自由を求めるジュン君の心のさけびのようなものが参加者の発言として出てくるようになりました。もうすでに力を蓄え、羽ばたくチャンスを待ち望んでいる期間のように私には感じられました。ポジティブサポートのセッションに参加していた人達も、ジュン君が必要としているサポートは、子どもの様に守られることではないと気付いているようです。何か新しくチャレンジしたいことを探すことのサポート、何か新しいことにチャレンジするジュン君のサポートが必要なのだと感じていたのでしょう。

新しい環境で新しい人間関係の中で楽しみを見つけることは、自分を試すことでもあり、冒険です。ジュン君はたくましくなっており、このキャンプはとてもいい機会だと私は思いました。少し困ることがあったとしてもそれをバネにできるのではないか。そして、彼がこれから突き進むのに大きな力となるのではないかと私はわくわくし、応援したい気持ちでいっぱいでした。

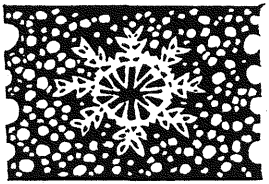
現在からの一歩・夢への一歩

中学二年生くらいになると、ジュン君は学校とのかかわり方を変えたようです。中学三年生になるとジュン君は、学校に行かない日が増えました。体調が優れないという時もあったかもしれません。しかし、ジュン君は生活に単調さを感じ、自分の可能性にチャレンジする機会がないと感じ、それを表現していたのかもしれません。もしくは、自分の次に進むべきステップや目指す方向を見出せないばかりか、模索するチャンスも与えられないもんもんとした感覚を表現していたのかもしれません。この位の年齢の頃には、変化を求め、自分の力を試すような経験ができる環境を欲する時期でもあると思います。

ジュン君が中学二年生の九月、ジュン君にとって大きな家庭内の変化がありました。彼のお兄さんがアメリカ

の高校へ留学したのです。ジュン君は優しいお兄さんと仲が良く、お兄さんは彼のライバルであり、憧れるような存在です。そのお兄さんがジュン君の生活から離れたことは、ジュン君にとって、取り残された思いと寂しさを感じたことでしょう。

現状の生活にはおもしろさが感じられず、活発さが欠けていくジュン君を見ていた御両親が、夏の間アメリカでジュン君がキャンプに参加することを考えたのです。ジュン君のお兄さんが望み、実現したように、ジュン君にも自分を試す機会がある開けた世界へ、と積極的に考え実現させたのです。



積極的に選択肢を見つける／創るということ

ジュン君の養護学校の先生には、ジュン君がアメリカのキャンプに参加するにあたって必要書類を記入してもらわなければなりませんでした。それは、能力的なことやジュン君との関わり方のアドバイス、ジュン君について特徴的なことを記述するようなものでした。その中に明記してある能力に関することは、お母さまのジュン君の評価とは違うところがあったと聞きました。しかし、私がもっとショックだったことは、ジュン君の特徴的な、ここでいう「彼らしさ」の明記に学校の先生方が苦労なさった様だということでした。確かにジュン君の全体像、彼らしさ、というものは、それぞれに違うイメージがあるかもしれません。しかし、チームを組んでいる担任で話し合えば、自分の生徒の特徴的な部分を考えだすことは難しくなかったのではないかと思わずにはいられません。

そして、先生方は夏休みにアメリカのキャンプにジュン君を送ることについて「何の意味があるのかわからない」と言われたそうです。その質問そのものに私は違和感を感じ、そのことについて考えずにいられませんでし

た。

ジュン君の全体像（人格、個性、人間関係、価値観、夢、希望といったもの）から見えてくるジュン君らしさは、どこへ？　ジュン君にとっての現実、生活から見えてくる、ジュン君にとっての必要性はどこへ？　未来の広がりを想像する周りの人の発想の転換とその必要性／意識はどこへ？　このようなポジティブサポートの大切にしていることが全く発想にない発言ではないか、つまり、ジュン君本人の人生の広がりという視点が欠落しているのではないか、と思わずにいられません。

多くの養護学校、特に中学部以降は、就業に向けて作業の訓練をするという姿勢が主流であり、何らかの成果を求めて日々のスケジュールを年間を通して実行している傾向があると思います。例えば、一般通念的にいう社会で必要とされる具体的な能力を取り上げて、それを訓練して補強し、それをその生徒の成果とする。そして、その生徒の成果は、先生の評価にさえなると聞いたことがあります。そういった限られた意味／目的の捉え方をしていると、ジュン君のように楽しみを求めて新しい環境へ行ってみることに価値を置く発想がないのかもしれません。

特に何らかの具体的な成果を目的として新しい環境に参加することを選んだのではなく、楽しめればいい。楽しい中で仲間と一緒に折り合いをつけながら生活することできっとジュン君は成長し、何か大きな自信と勇気を掴んで帰ってくると信じた御両親の感覚（期待、希望、信頼感、夢を託す）が理解できなかったのかもしれません。しかし、ジュン君の御両親が信じたように、そうした機会を得ることで人の可能性が輝き、人生に広がりが出て、自信を持ってその人が豊かになると私は信じてい

ます。人は楽しみながら何らかの意味を見出し成長するのではないでしょうか。自分の可能性を試しながら、自分らしく生きている感覚が持てるのではないでしょうか。自分の可能性を信じてくれている人がいることで、ちょっと頑張る／新しいことにチャレンジする勇気が湧いてくるものではないでしょうか。

＊

その人の全体像・自分らしく生きている感覚

ジュン君にはジュン君らしさがあります。ジュン君が生きてきた歴史があります。生きてきただけの経験があり、その間に育ってきた人格、人間関係、価値観、社会性があり、プライドもあります。ジュン君には、ジュン君の夢があり希望があります。

ポジティブサポートは、それらが尊重され、それぞれの人が「自分らしく生きている感覚」を、その時その時もてる環境づくりを目指しています。誰にでも、自分の人生に「自分が生きている感覚」を持つことが必要です。「その人らしく生きる」ということを考えるためには、共に生活を創る人々のその人に対する理解が、「その人の全体像」にできるだけ近づいていくことが不可欠です。それを支えるのがポジティブサポートのセッションです。

夢・希望

ポジティブサポートを継続していると、それぞれの個性を大切にし、その人の全体像を立体的に考えられるようになります。周りの人達も、自然とその人の夢や希望が叶えられる生活を望み、実現することに気持ちが向けられるようになると私は感じます。人の夢も希望も、時が流れると共に変わります。それらが実際に叶うことよりも、それをまわりに受け入れられることに、人はまず喜びを感じると思えます。そして、現実を肯定的に受け止めることで、現在に充実感を感じ、また一歩進む力が

湧いてくる。つまり、夢・希望を持つことと、それに向かって歩んでいる感覚が、現在を生きる力になると思います。

ポジティブサポートのセッション

ポジティブサポートの実際の一回一回の場面をセッションと呼んでいます。セッションの行われ方としては、その中心となる人に関わる人達が「その人」と共に集まり輪のように席につきます。そして、ファシリテーターが課題を提示します。その課題は、具体的なその人の現実に根ざしたもので、例えば「○○さんが好きなこと・得意なこと」、「○○さんが嫌なこと・苦手なこと」とか、「○○さんが選択していること」・「他の人が選択していること」といったものです。このような課題に基づいて、その人の視点に立って参加者が一人ひとり順番に発言していきます。つまり、セッションの場で、参加者は自分のその人とのかかわりや生活を振り返ります。そして、それぞれの立場で育んでいる関係から見えてくることや感触を、言葉にしていくのです。発言の一つ一つは、書記によって書き出されていきます。異なる立場・関係から見た他の人の発言も聴くことになります。その中で、参加者は新たな視点に気づいたり、自分の考えを捉え直したりし、対象となるその人の全体像が広がりを持って見えてきます。本人も同様です。自分のことをまわりの人達がどのように理解しているかを聴くことで、自分をより理解できる場合もあると思います。こういったセッションの過程を土台として、その人の現在と将来を繋げ、可能性を生かした将来のヴィジョンを本人と参加者が協力して作り上げていきます。

ポジティブサポートを継続する意味

ポジティブサポートにはいくつかの段階があります。まず、「その人の立場に立ってみる」ことから始まり、そして、その人の置かれている現実を見直すところから

始まります。実際は、その人にとって現在のその生き方がどんなものか、その人にとっての生きる意味における優先順位はどんなものなのか、その人が何を必要としているのか、どうしたらその人にとってより満たされるものになるのかを、その人本人と一緒に考えていくものです。

それぞれの段階においてセッションを継続し、ていねいに行うことに意味があると考えます。その過程でその人から見えている現実が周囲の人達が知っている現実と違うことや、その人との関係性における距離感が見えてくることも多いようです。できるだけそれぞれが持つ考え方の枠や見方のフィルターをはずし、その人を理解したいと思う気持ちを持ってその人に接することで、すでに関係は変わります。つまり、セッションの中で、すでに関係は変わっていると考えられます。そうしてそれぞれの中で起きる内的変化が、その人の将来のヴィジョンを描く上で現実的に影響を及ぼしていく原動力になるのです。その例がジュン君の場合です。

ポジティブサポートは、変化を肯定的に捉えて想像力豊かに選択肢を創り、将来のヴイジョンを描き、それを実現していくことをサポートするものです。各セッションで浮き彫りになるその現実とその意味合いを捉え直すことにポジティブサポートを継続する意味があると考えます。時と共に変化し続けるその人の現実を共に認識しながらセッションを継続するということは、それこそ現実を将来につなげる行為、現実から将来へ共に歩んでいく行為と言えると思います。

（ポジティブサポート研究室主宰）

障碍をもつ幼児の保育(17)

―この子と出会ったとき―

津守　真(M)
津守　房江(F)

ちょっと立ち止まって

今、この話をしているのは夏休みも終わりに近いころですが、夏には私たちは二人で各地に出掛けていろいろな人と出会いました。話は自ずと保育のことになりましたが、ここらでちょっと立ち止まって、心に残っていることを話しましょう。

子どもの思いはそのときには分からないことが多い

F　私の心に残っているのはS養護学校での研究会のことです。個人的なことですがここには私たちと親しいS先生が働いておられます。以前、上京して、愛育養護学校で勉強しておられたとき、そのご一家と親し

くなりました。一緒にクリスマスのキャンドルサービスに行ったことも忘れられないことです。

M　そう、S先生は十五年前内地留学で、東京の愛育養護学校に長野から一家で来られました。二人のお子さんE君(五歳)とK子さん(三歳)は愛育養護学校の家庭指導グループの保育の中に一緒にはいってましたね。両親と一緒とはいえ、知らない都会で生活し、知らない子どもたちの中に入って過ごす大変さを、今も覚えています。

F　両親によってお子さんたちはしっかり支えられていたのでしょう。初めのころは子どもたちにとっては大変な状況だったでしょうが、それを乗り越えるような行動が、遊びや言葉の中に見られましたね。K子さんがシャワー室でシャワーを指して、「これ、うちにもあるよ」と言ってから、「汽車に乗っていくおうちじゃなくて、Oさんのうちのそばの……」と私に話してくれたのは、来てから何カ月もたったころでした。東京で借りているOさんの家と長野の家と二つのおうちがK子さんの中でしっかり捉えられて来たことが分かりました。子どもって自分の居場所を確認するのにこんなに時間がかかるのだといじらしくなりました。大変な状況の中でもちゃんと成長していくのですね。

M　今回、高校生になったK子さんが、一夜、自分が焼いたチーズケーキをホテルに差し入れてくれました。とてもおいしかったね(笑い)。あのときには、こんな立派な若者になるなんて考えもしなくて、目の前の幼い子どもが何とか日々快適に生活するようにということしか考えていなかったのに。

変化のときは危機をはらんでいる

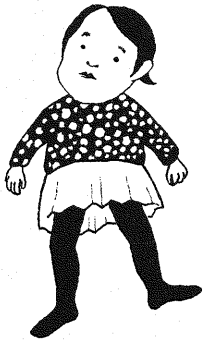
M　そのことは研究会で症例として報告されていた子どもについても同じようなことがありましたね。保育園から小学校に入学したばかりの子が、今まで保育園で見せていたお行儀のよい姿とはまったく違った面を

見せるようになったというのがあったけれど、それは我が儘になったのではなく、自分の考えを表現し始めたのだというように、養護学校の先生方が成長と捉えて「すごいすごい」と言っておられたのは大事なことだと思いました。

F　人生には理不尽なこともあるから、それを覚えるために自分の思うようにならないことも我慢させるのがいいという意見もあるけれど、それはどう考えたらいいのかしら。

　私には子どもがやっといま『自分』に気が付き始め自分の考えを主張し始めたのを、大事にしたいという担任の意見に賛成でしたが……。

M　その発表の中にあったことで、その子がお気に入りの自転車に乗りたいけれど、ほかの子が乗って行ってしまったとき、ものすごく泣いて怒る事が何度もあった。その先生がみんなの行ってしまったあとでお気に入りの自転車を探してきたら泣き止んで「ありがとう」と言ったという。我慢することを学ぶより愛すること、愛されること、を学ぶのが基本だと思う。こういうことは子どもの傍らにいるとき、毎日起こることだけれどいろんな人がかかわっているときには、迷ったり人の見ていないところでこっそり子どもの願いをかなえてやろう、と考えたりするのも大人の現実かもしれない。



F　それから入学したばかりの生徒が、裸になって困ると言うことも報告されていました。入学式のその日にパニックになって裸になった。

M　裸になる子どもはいつでもいますね。何人ものそ

ういう子どもに接して、子どもよりも大人の方が人の目を気にしてることが多いですね。子どもは服も何もかもかなぐり捨てて、何かに没頭出来るようになるのは、学校が自分の場になったことの証拠ですね。学校では裸でもいいけれど外では服を着てくれるようにお願いしてそうなるときもあります。でも、必ず変化のときはくる。子どもが大人を変えていく。

F　そうそう、それによって子どももまた変わる。子どもは状況が変わるときに、不安と危機感を持つでしょう。それに大人が気が付いて心を向けるとき危機ではなく成長のときになるといってもいいのかしら。

教育には目標が必要でしょうか

F　よく聞かれることに、子どもを受容することと、少々無理しても子どもにつけたい力の目標とその兼ね合いを、どのように考えていったらいいかということがありますね。障害児といわれる子どもたちの教育ではそれが強いように思います。

M　そうね。たびたび聞かれるけれど、ひとりひとり違いがあるから学校で決めた目標では無理がある。その子のもっているいいところを、どうやって膨らませていけるか、と考えるのでしょう。

F　そうなるとカリキュラムについての考え方も違ってきますね。未来についての設定ではなく、この子の歩んだ道を検証してみる、そしてその先は子ども自身が開いていくようにおとなが協力するのが、実際に私たちがやっていることではないかと思うのです。

　私は保育に入るときもっと面白くしてあげようと思ってしまうのですが、そんな私の気持ちを抑えて子どもが先に立っていくようにと考えるまで、随分時間がかかりました。もちろん子どもが自分から興味を持つようなものを用意したり、環境を整えたりは大事なことですが……。

おとなは子どもが長い人生を全うしていけるように協力すること

M　学校教育という枠を外して考えると、教育に目標が必要だという考えは絶対ではないですね。私が立ち戻って考えるのは「この子の長い人生を全うしていけるように、自分はどうやって協力していけるのか」という視点にたって考えます。

F　それは、本当に大事な視点ですね。障碍のある子どもだけでなく、どの子どもにとっても共通したことですね。

いま、『生きる力』ということがよくいわれますけれど、本当にその中身を考えるとさまざまです。ある人は経済的な能力を考えるし、ある人は他人に迷惑をかけないようにと考える、いい学校に入るのがそのために必要と考える人もいる。でも、いま言われたようにその子が自分の人生を全うできるように協力する、と考えることはもっと深いところまで含んでいて、同感出来ます。

M　私は『長い人生』といったけれど養護学校に携わっていると、かならずしも『長い』とはいえない出来事に出会うこともあります。子どもの死に出会ったとき「ああ、きのう、これだけのことをやっておいて良かった」と思う。子どもが「どうしても」ということをやっておくことは、子どもにとっても自分にとっても大切だと思う。

胸の痛む事も思い出しますし、時には悔いもありますが、子どもからもらった元気と変革する力をもってまた新しくやっていきましょう。

ロンドンの子どもたち
―プレイグループでの半日―

清原　規子

子どもの養育事情

ロンドンには、実にさまざまな人たちが集まっています。夫婦で自分の子どもを育てている人はもちろん、養子をとってその子どもを育てている人、シングルマザーの人、難民もかなり受け入れているので、貧富の差も結構あります。人種もさまざまです。そのような中、一人一人のニーズに合わせて、子どもをサポートする側もかなりいろいろな職種があります。個人的に見てもらう場合も、資格の要らないオ・ペア（語学学校に行きながら、子どもの世話をして欲しい人の家で生活し、その子どもの面倒を見る人）から、資格を持ち、犯罪歴がないという証明書（ポリスチェック）を持っているナニー（その子どもの家で面倒を見る人）、チャイルドマインダー（自分の家に子どもを連れてきて面倒を見る人）などがあります。集団では、経営母体もさまざまですが（公立、教会、子どもの親など）、幼稚園

あるいは保育園（半日のところと一日のところがあります）、そして、プレイグループ（一日の場合でも、午前と午後では子どもの入れ替えがあったりするようです）等です。

特に私が現在ボランティアとして通っているプレイグループがある地域は、公立の幼稚園がほとんどなく、その分プレイグループが発達していて、二十グループ近くあります。そして、行政の方も、この二十のプレイグループを支援、教育するのに非常に力を入れています。

私の働いているプレイグループ

ロンドンの北部、中流階級の人たちが集まっている地域にあるレインボウプレイグループは、教会のホールを借りて、子どもの親たちが経営しています。行政からは、補助が出ていますが、親たちも、パーティーやオークションなどで、資金を作ったりしています。

月曜日から金曜日まで朝の九時三十分から十二時まで、スーパーバイザーを含む四人の資格を持ったスタッフが子どもたちの世話をしています。子どもは二歳半から五歳までの子が来ています。誕生日が来た段階で参加することができるので、時々新しい子どもが増えたりします。登録している子どもは三十五人ほどいますが、全員が毎日来るわけではないので、一日だいたい二十二～三人程度の子どもが遊びにやってきます。国際色豊かで、イギリス人はもちろん、インド人、スペイン人、ロシア人、アフリカ人、トルコ人、イタリア人、ギリシャ人などの子どもたちが来ています。スタッフは子どもに英語で話しかけます。英語は喋れなくても、子どもたちは雰囲気でわかるのか、コミュニケーションはとれています。おそらく、スタッフの暖かい空気で、安心して落ち着いていられるのだと思います。

プレイグループでの一年

九月から新学期（秋学期）が始まります。昨年までいた子ども達も何人か残っていますが、半分くらいは新しいメンバーです。全員同じ空間で遊んでいるのですが、それぞれの子どもに責任者のスタッフが決められていて、個人懇談が各学期に行なわれる時は、そのスタッフと、懇談を希望した親が話をします。レインボウプレイグループは、各子どもの記録をかなり丁寧にとっていて、親はいつでもそのファイルを見ることができます。また一年の最後には親に記念としてあげています。

それぞれの学期（秋、春、夏の三学期制）の中頃にハーフタームといって、一週間程の休みがあります。スタッフは毎週のトピックを決めていて、たとえば昨年の秋学期の前半は、「動物」とし、恐竜からペット、水中の動物まで週ごとに焦点をあて、そ

▲すぐ近くの公園に散歩にでかけて

のトピックに合わせて遊具を準備したりします。この夏学期は、「旅行」がトピックで、駅に電車を見に行ったりしました。時には、近くの大きな公園（ただただ広い、木に囲まれた芝生広場）まで散歩に行って自然を楽しみます。そんな時はスタッフだけでは子どもを見ることができないので、何人かの親たちに一緒についてきてもらいます。

季節の行事もそのトピックの一つです。クリスマスは親がちょっとしたお菓子やジュースを準備して、簡単なパーティーを開いてお祝いします。イギリスで、もう一つ大きな行事はイースターです。チョコでできた小さなイースターエッグを使ったお菓子を作ったり、カードを作ったりしてお祝いします。イギリスの行事だけでなく、各国の行事も話して聞かせたり、絵本で読んだりして上手に取り入れています。この夏学期には、日本のボランティアグループの人たちがこどもの日にちなんで、日本の文化を紙芝居や折り紙などで紹介してくれました。

プレイグループでの半日

朝、プレイグループが始まる四十分ほど前にスタッフは準備に来ます。ただし子どもがいるスタッフもいるので、彼らは自分の子どもを学校に送ってからやってきます。

子どもたちが母親、父親あるいはチャイルドマインダーに連れられて、やってきます。ドアは九時半になってから開くので、それまではドアの外で待っています。ドアが開くと、自分の名前の札を箱に入れ、ホールに丸く並べてある椅子の所に行って、他の子どもたちが来るのを待ちます。親もすぐに出て行く人もいれば、出席をとる間、子どもの隣に座って一緒にその場を楽しんでいる人もいます。

出席を取り終わると、子どもたちはみんなそれぞ

れ自分の好きな場所に遊びに行きます。親と離れるのが不安な子どもは、子どもが落ち着くまで親が残っていたりします。特に初めて参加した子などは、一週間、あるいは一ヶ月ほど母親が一緒にいたりもします。また、一時間ほど他の部屋に行って様子をみたり、ということもしたりしながら子どもが無理なく慣れていくように配慮をしています。毎日お手伝いの親が一人いるので、その人も、子どもたちと遊んでくれます。

半分に仕切られたホールの中には、水トレイ、砂トレイ、パズルコーナー、粘土コーナー、家コーナー、ミニカーコーナー、ペイントコーナー、ブロックコーナー等ありますが、それぞれのコーナーに置いてある物はその日によって少し違っています。また、毎日一つスタッフが準備した特別活動があり、簡単な料理をしたり、製作活動をしたりするのですが、このコーナーは結構子どもたちに人気です。家コーナーには白人や黒人の赤ちゃん人形が置いてあります。壁に貼ってあるポスターも、国際色豊かです。

子どもたちがトイレに行く時は必ず誰かスタッフがついていきます。私も最近ようやくポリスチェックを終わったので、私も子どもたちをトイレに連れて行くことができるようになりました。

十時半過ぎくらいから片づけを始め、スナックタイムの準備をします。普段は、子どもたちの親が持ってきてくれたフルーツを食べ、牛乳や水を飲むのですが、料理コーナーがあった日は、自分たちで作ったクッキーや、ピザパン、サラダなどを食べます。誕生日の子がいる時は、その子の親がケーキを持ってきて、みんなで誕生日の歌を歌ってお祝いします。

スナックタイムが終わると、反対側のホールに置いてある、滑り台やジャングルジム、平均台、ボー

ルやフラフープなどで思い切り身体を動かして遊びます。あるいはもう一つのホールに移動して、車や三輪車で遊ぶのも、子どもたちは大好きです。走り回ったり、追いかけごっこをしたりしている子もいます。スタッフは、子どもたちが怪我をしないように注意して見守りながら、ちょっとお茶を飲んで休憩です。最近ようやく母親から離れてプレイグループに参加できるようになった子は、この時間辺りにちょっと疲れてもくるのでしょう、寂しくなってスタッフに甘えて抱っこしてもらったり、何度も母親に会いたいと訴えてきたりして、そのつどスタッフに優しく声をかけてもらっています。

思い切り遊んだ後は、また最初のホールに戻って、スタッフの人に本を読んでもらいます。大きな本で絵を見ながら話を聞くこともあれば、人形を使って話をしてくれることもあります。

そろそろ迎えの時間です。子どもたちは椅子に座

▲スナックタイムの前に手遊びを楽しむ子どもたち

り、自分たちが描いたり、作ったりしたものをスタッフからもらいながら、迎えに来る大人を待ちます。親でない場合は、誰が迎えにくるかをノートに書いてもらってあるので、子どもを手渡す時にその人にサインをしてもらいます。親の姿が見えると、ドアの所に立っているスタッフがその子の名前を呼んでくれます。みんな迎えが待ち遠しくて仕方ありません。ドアの方をじっとみつめながら、私の方を向いては、「おかあさん……」とつぶやいている子もいます。自分の名前が呼ばれると、それは目をきらきら輝かせて嬉しそうに親の所へ行きます。

子どもが全員帰ってから、私たちも解散です。次の日の確認を少しだけして、それぞれ帰って行きます。

これが普段の活動ですが、子どもにいろいろ体験する機会をと、週に一度音楽の専門の先生がやってきます。歌を歌ったり、音楽にあわせて身体を動かしたり、絵本を読んでもらった後、その絵本とつなげて楽器で遊んだりして楽しい一時を過ごします。その日は気分が乗らないのか、みんなが踊っているのを、じっと座って見ている子も何人かいたりします。スタッフは声をかけはしますが、無理強いはしません。音楽の先生も、子どもたちの言葉や表現を上手に生かしながらすすめていきます。

同じプレイグループでも、図書館の部屋を借りていたり、スタッフの考え方もさまざまで、場所によってかなり様子が違うようです。レインボウグループはどちらかというと庭とかはないものの、かなり恵まれた場所のようです。スタッフにも恵まれていると思います。きっと地域的なものもあるのでしょうが、親とスタッフがお互いに支えあい、共に子どもを育てていこうという姿勢が子どもにも伝わって、子どもがのびのびと自分を表現しているのではないかと私は思っています。（ロンドン在住）

ある日

撮影・平野　清

保育を積み重ねること

―堀合文子先生四歳児の保育ビデオから―

関口はつ江

前回（一〇二巻一月号）堀合先生の三歳児の保育ビデオの一端をご紹介しました。自分たちで遊ぶ力が育つよう、遊びのための要求を殆ど無条件に受け入れ条件を整える、子どもの求める心を大切に十分に手をかけて世話をしながら、正しいやり方を行動として伝える、人として大切なことは逃さず教える、きめの細かい保育です。

一見過保護とも見られるような、そして保育者からの言葉かけは極力控えた年少組の保育が、次のどのような育ちとなって表れているか、さらにこの年齢に合わせた指導はどのようにしているのか、二年目を追跡したビデオ（春・秋編二巻）が完成しました。まとめた形で一部をご紹介します。

生活習慣が生活が自分のものになりつつある

先生が手を添えて靴を履かせたりコートを脱がせていた人が、登園からコートを掛ける動き一つ一つにも落ち着きと自信が見える（写真1）。遊んだ後の物の始末が実に丁寧にきちんと出来ていて驚くほど（写真2）。追いかけごっこで物陰に隠れたお子さんが弾みで傍のくず入れを倒しても、立ち去りながら当たり前のようにひょいと直して走り去る。

問「縄をきちんと縛ったりしていますね」「身の回りの世話は何歳までやって上げますか」

答「言葉で言ったり指示をするよりも、私がやったことをその通りにやっているのです。私がやるのを手伝ったり、きちんと縛った物を篭に入れるよう頼んだりしたのです。」

「身の回りのことはまだこの時期はちゃんとは出来ていません。自分でやった人にはさせますが、やらない人には無理にはさせません。やりなさいって言えばやるけどそれは受け身でしょう。やって上げることはそれを見ていますから。」

一人一人の遊びから響き合う遊びへ

誰かが始めた遊びを受けて、自分の遊びが生まれそれが行き来して続いていく（写真3）。

例えば一人の子が床に広げたフープは、後から通る子ども達によって上手に遊びに生かされるなど、自分中心に生活しているようだが、周りをよく捉え、考えながら自分の遊びに取り入れていることが分かる。二人でやっていた『なべなべそこぬけ』は傍でうろうろしていた子をいつの間にか加えて四人になっている。電車ごっこでは（写真4）リズムを合わせるために何度も何度も声を掛け合って繰り返し同時に跳ぶ。揃うことの喜びを自分たちで味わっている。そして互いに先頭を交替して譲り合って遊ぶ。

問　「見えないところで遊んでいるお子さんが気になりませんか」「よく譲り合って仲良く遊んでいますね」「絵本を読んで上げるときなどはどのようにしていますか」

答　「年少組一年経って私もお子さんも互いに信用して、こんなふうに遊びをする、と分かって来ています。人をぶってはいけないとか分かっていますから。私が一年間やってきたことがお子さん達の中に入っているのだと思います。」

「こういう生活（遊びの）のこの時期になると、一人に本を読む時声を大きくして読むと、絵を描いていてもままごとしていても、聞いているだろうと言うことを考えて、意図的に声を大きくすることもあります。聞きたければ自分の生活をしながら聞いている状態になっていますから。年齢が小さい時はわーっと寄ってきてしまいますが。」

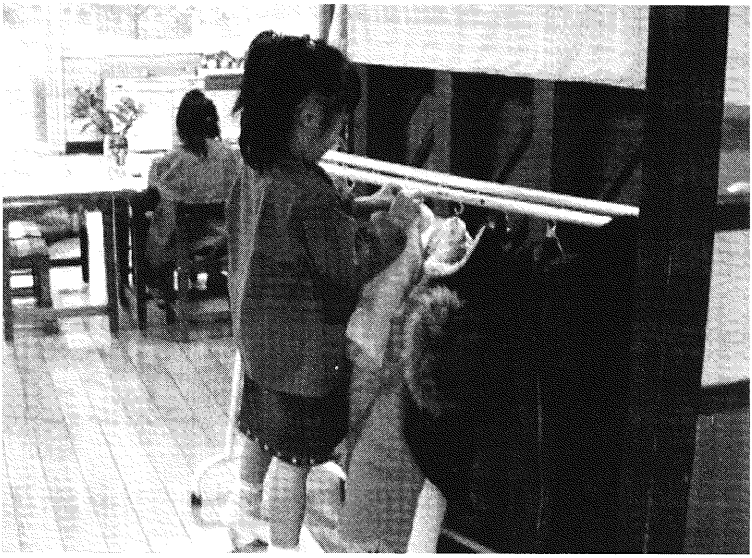
自分の欲しい物や活動のイメージが確かになる

朝の保育室の環境設定が変わり、遊具が片づいた状態になっている。棚に電車やミニチュアの家など作ったものが飾ってある。一方でちょうちょの羽を着けて動いている女児のために先生が音楽をかけるが長くは続かない場面がある。

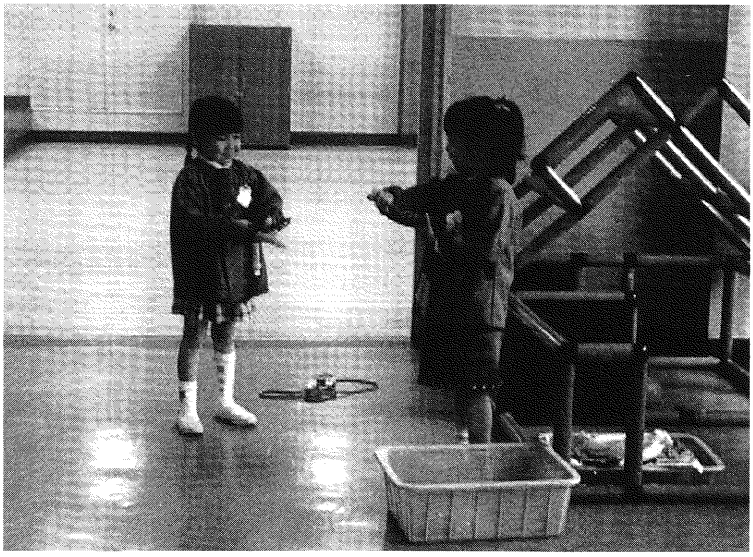
問　「部屋の遊具の置き方を変えたのは？」「いろいろな作品を作るきっかけは？」「何を作りたいか、したいかはっきりイメージをもって先生にいいますか」「音楽はお子さんが求めたのですか」

答　「三歳児の時は遊具を出して置きましたが、いつも出してあるとそれで遊ぶ習慣の人がでてしまう。それをやらないと先に行かないようになってしまうので、片づけた状態にしておいて自分で考えて遊んで欲しいし、その時期になっています。」

「作る物は私が作りましょうといったものは一つもあ



▲写真１　コートを掛ける動きに落ち着きと自信が見える



▲写真２　遊んだ後の縄をきちんと縛る

りません。お子さんから言ってくるのです。一学期は何していいか分からない状態もあります。そういう状態が分かれば聞いてあげる。「あれと同じ？」など。それで、自分で考えなければならない、自分で決めなければならないと思うようになるのでしょう。真似でも、自分の意志で「あれ」といったのだからそれでもいいと思う。でも次にはあなたの本当に好きなのどれ？　と聞いてあげたり。イメージがあってやりたいことがある時、それを描いてやると一生懸命やる。気になる時にはもう少しお顔きれいにしないと可哀相だからと端を少し塗ってあげたり。」

「大人の意識が先に立ってやろうとすると続きません。ちょうちょはそれになりたいだけなのに、大人として欲を出して音楽をかけて上げてしまいましたね。」

好きなことには活動が長続きし集中する

お面や日傘など遊びに使う物の製作に長い時間取り組み、根気よく最後まで完成させています。長いときは午前中一杯使うお子さんもいる、とのこと。

問　「最後まできちんとやっていますが、途中で止めてしまうお子さんにはどうしますか」

答　「途中で止めてしまうお子さんには『ここまでできたわよ』って作ってやる。すると『あっ、さっきのができた』って思うでしょうね。最後までやらなきゃ駄目ってそういうことといわなくても。あれもこれもやりたくて気が散る時期でもあるから『また後でやってね』といっておくこともある。その時やらなくても分かっていきます。」

集団（仲間）とつながる気持ちが強くなってくる

片づけは先生が一部の子に声をかけるといつの間にかみんなが一緒になって力を合わせてやっている。仲間に入りにくいYちゃんも先生が一声かけるとみんな

▲写真３　誰かが始めた遊びを受けて自分の遊びが始まる

▲写真４　声を掛け合って揃うことの喜びを自分たちで味わっている

の中に入るようになっている（写真5）。お弁当の前、誰からともなく「大きな古時計」を歌い出し、大合唱となりとても楽しい一時がくり広げられる。

問　「集団に入りにくいお子さんにはどうしてますか」

答　「すぐにこない人にはここあいているわよと言っておくと入ってくる。無理矢理連れてこなくても。来たら『よく帰ってきたわね』って褒めてやります。」

「あの歌は大きい組みの人が歌っているのを聞いてきて覚えたのです。私が教えようとした歌は覚えてくれなくて、自分たちが好きで歌いたいのね。」

先生の願いを根付かせるために

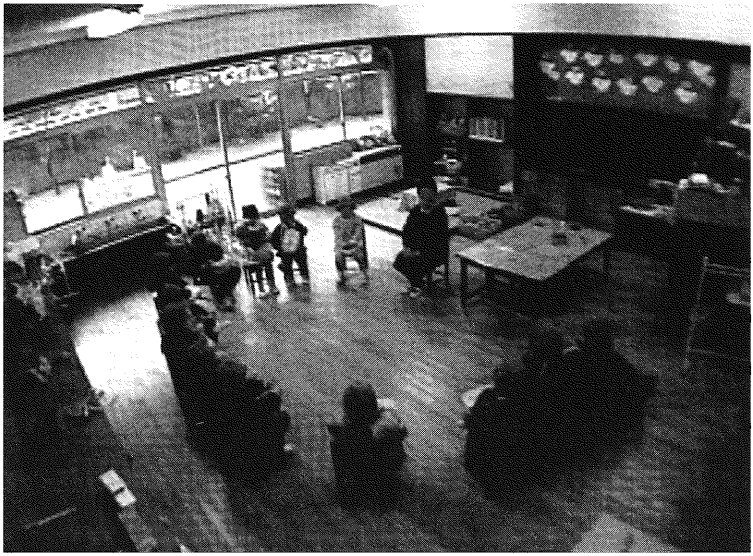
問　「遊びの誘導はしないのですか」

答　「あれをしたら？　と言うようなことは、言ってあげたいけど言わないように我慢しています。自分で考える力を引き出した方がいいから。言ったらこっちを向いてしまうから。四歳ではまだ本当に夢中でやる遊びにはなっていないので、まわりのこともお友達のことも気になるし、私のことも気になるし……。」

問　「剣を作って遊ぶのは危険ではありませんか」

答　「剣については考えましたが、危ないから真似だけねって、約束する。テレビを見ているからやりたい。でも見た通りをとってしまうと将来心配だから、その怖さを伝えなければ。」

保育の基本は変えないで、子どもの状態をよくみて、働きかけの切り口とレベルを変えていることがよく分かります。子どもの次の段階でのよりよい行動につながるためのかかわり方に心を砕くことで、子どもの側には「気付かれないように無理のなく」伝わっていて、安定した成長が図れているのだと思いました。先生が最も大切にしている「心」のつながりは先生と子どもから、子ども同士へと広がりつつあることも見



▲写真５　仲間とつながる気持ちが強くなってくる

えてきました。

今の感受性の鋭い、敏感な子どもに応じるためには、「保育者は全く気が抜けない」こと、真剣に向かい合うことで確かに育つことが見えてきたと思いました。

（十文字学園女子大学）

堀合先生の保育ビデオ　三歳児編、四歳児編完成（五歳児編制作中）

問合わせ　雑司ヶ谷幼稚園内実践保育研究会（電話・Ｆａｘ〇三―三九八七―三五三七）

保育実習生として
成長していく時に大切なこと

梅田　優子

はじめに

教育実習及びその事前・事後指導のあり方は・保育者養成にとって重要な課題です。私は、学外学習担当窓口として二年目を経験していた二〇〇二年一月に、実習協力園の保育者の方たち八十九人に、実習評価についてのアンケート調査を行いました。お忙しい中で実習生を受け入れていただき、またその様子を養成側へ返していただいている保育者の方々の実習評価に関する意識の一端と、本学の現在使用している評価票の再検討の手がかりとなる資料を得ようと考えたからです。回収率は七十七パーセントでした。

今回の調査は、その目的からも明らかのように、対象も限られています。しかし、その分、できるだけ保

育者の方たちがどのように感じておられるのかをとらえることができるようにしました。実習協力園の保育者の思いを知ることができたことは私にとっては大きい収穫でした。本稿では、その中で、保育者の方たちが実習においてどのようなことを大切に考えておられるのかについて書きたいと思います。それは保育者としての成長を考える上でも示唆を含んでいると感じます。

回答者の概要

回答くださった方は、保育歴五年未満、五年以上十年未満、二十年以上の方が約三割ずつ、十年以上二十年未満が約一割の内訳でした。私立においては保育歴十年未満の占める割合が高く、公立においては二十年以上の保育者の割合が多いという特徴をもっています。

実習の評価をする際に大切にしていることについて

保育者がどのようなところを大切にして実習生の評価を行っているのかを聞きました。自由記述で求めましたので、記述された文の内容、使用された単語・句等の整理や分類を行い、その特徴を明らかにしようと試みました。一人の方が幾つかの視点から書いてくださっている場合もあり、その際には複数の分類に属するので、必ずしも総和が、全回答者の総和と重なってはいません。記述内容から大まかに五項目に分類されました。

1．実習に臨む姿勢・意欲

実習評価の際に大切にしていることとして、学生の実習に臨む姿勢・意欲についての記述がほぼ全員に見られました。保育者の方たちは、この後の項目でも、全般的に実習生の姿勢を見ていこうとする傾向性を持っていました。ここではその中でも『実習という場に臨む際の構え』のような記述を分類しました。

例えば、「幼児理解や保育の技術については未熟なものがあたりまえですので、やる気や意欲が感じられるか」といった記述が二十三件あったのをはじめ、姿勢に関しては、「前向き」（十四件：以下同様にカッコ内の数字は記述件数を示します）「積極的」（八）「一生懸命さ」「熱意」「誠実であるか」（各四）といったこともあげられていました。また「学ぼうとする姿勢」（八）もありました。保育実践の場の中で、『まずは何ごとにも自ら体験していこう・学んでいこうとする姿勢を大切にしたい』と多くの保育者が考えているといえるようです。

さらに、『体験を通して自分なりに考える姿勢及び、それを次に生かそうとする姿勢を大切にしていきたい』とする記述も二十四件見られました。例えば「実習とは教科書やその他の書物から離れ、頭の中で考えるだけではなく身体全体を使いながら、子どもたちと触れあうことのできる数少ない場となります。そのため成功すること、失敗し挫折することにより、その後工夫し達成感を得る等、短期間で様々な気持ちを味わうことになります。その中で実習生が自分自身で悩み考え、前向きに取り組んでいたかどうかを大切にしたいと思っています」「自分なりの課題をもちながら前向きに取り組んでいるか。日々の話し合いの場で自分なりの反省や思っていることをしっかり表現できるか。また、反省したことを自分なりに次に生かしていこうとする構えが見られるか」などです。

これらについては、高野ら[1]のアンケート調査の結果

と重なる部分があります。実習評価二十八項目について三段階評定により、保育者の重視度を探っています。その結果、特に二年生においてはその評定者九十・一パーセントが「積極的に学ぼうとする意欲があったか」を「特に重視する」と回答しており、次いで高かったのが「子どもたちの中に積極的にはいっていけたか（八十五・八パーセント）」でした。調査対象（保育所）や、項目の設定の仕方の違いもあり単純には比較できないでしょうが、それでも子どもにかかわる場の保育者が実習に重視するものの共通性は感じさせられます。実習生の心情や意欲を重視する傾向は「通年教育実習」体制で実習をおこなっている石川ら[2]の結果にも共通しています。

改めて、実習が実際の保育の体験の場であるという原点を確認するならば、前述した実習生が自ら体験していこうとすること、そしてその体験を通して保育時間終了後に考察しようとすること、それをまた動きの中で生かしていこうとすること、という体験的な学習の本質的な営みを保育者は支えていこうとしているとも考えられました。そしてこの営みは、保育者としての実践と実践後の省察という、保育の質を高めていくための本質的な営みにつながるものとも思います。「教育実習が学生にとって『経験学習』の場であると共に、その学習の仕方（観察・記述・表現）自体が、教育実践学の基本的あり方を学ぶ基盤となっている。」との小川[3]の指摘も重なってきます。

2．子どもとのかかわりと理解

子どもとのかかわりの姿勢や理解を大切にしているとの記述も四十五件あげられていました。子どもとのかかわりの面に力点をおいた記述（十二）としては「子どもと接している時の様子。例えば自分から積極的に関わっていこうとしているか、子どもの声をききとめているか。子どもと同じことをまねたり、子ども

と同じ視線に立ってものを見ようとしているか。子どもと遊んでいる時の表情など」といったものです。理解に力点をおいたり、両方をあげる記述（九）としては、「子どもたちをよく理解しようとしているか」「子どもに対する理解度」「幼児の内面的な理解、思いを知ろうとしているかどうか。幼児と共に生活を楽しむことができるかどうか」などです。

子どもとのかかわりに関しては、かかわる姿勢というだけでなく、実際に実習生の行動としてどうであったか、また子ども理解に関してもその姿勢だけでなく、実際に理解できているかどうかをあげるなど、その姿勢と同時に実際にできるかどうかといった記述が混在している点に特徴があると考えられました。

子どもとかかわり、かかわりつつ理解していくことは最も基礎的な保育行為です。外側から子どもを理解するというのではなく、かかわることに基本を据えて理解していこうとする姿勢や態度及びその力の育成が、実習段階で重要であるとする保育者の志向性がよみとれます。

江口[4]らの調査においても、保育の知識や技術の習得も大切ですが、それ以前に子どもとのかかわりの中で子どもを理解するということができない学生が多いと実習園が捉えていることなどを明らかにしています。

子どもや保育理解の力の育成には、かかわりを通しての学びと同時に、少し身を引いたいわゆる第三者的な立場からの観察によって可能となる学びの両方がバランスをもってなされることが必要ではないかと私自身は考えています。実習生の成長の時期等考慮して、そ

のバランスのありようを考える必要性を感じさせられました。

3．実習の記録／責任（部分）実習／評価票記入の際に関すること

これらが、残りの三項目で、記述の割合はぐっと減ります。

実習の記録に関しては、「日誌、指導案の提出状態」（五）、「生活の中で起こったけんかや子どもたちの様子を見ての〝実習生の考え〟が記入されているかという点です。

〈例〉○○ちゃんの気持ちは～だったのではないか。○○先生は～という思いでこう話していたのではないか。○○くんの行動は～だからだと思うなどが大切」（四）等です。提出状況という基本的態度についての側面と、自分の考えが記入されているかどうかが大切にされていました。

責任実習に関しては、「事前の準備をしているか」といった点が強調されており、その部分実習の実際がどうであったかというよりは、それに向けて実習生ができるだけの努力をしているかどうかを大切にしていることが窺えました。

評価票記入の際に関することとしては「優れていると思われるところ、足りないと思われるところどちらかのみならず両方について触れていきたい。かたよった視点にならないように心掛けている」などです。その他としては、「気配り」（二）、「笑顔」（一）「素直さ」「温かさ」「明るさ」「その人の持つ雰囲気」「人間性」（各一）など、性格や資質を大切なものとしてあげている保育者も少数ですが見られました。

おわりに

このアンケートでは、実習生の評価票をつけるにあたって、なにがしか困ったり疑問に感じたりする人が

全体の六十四パーセントもおられることや、その内容についても幾つかの特徴が見えてきており、今後考えてみたい課題です。

これらの結果をふまえ、養成の側としての実習への願いなどもあわせて、今年度から評価票を改変しました。実習打ち合わせ会での話し合い等を通して、学生の実習体験をより生かしていくことができるような実習及び事前事後指導のあり方を探っていきたいと思っています。

最後になりましたが、お忙しい中、質問紙に回答をいただきました本学幼児教育学科実習協力園の先生方に御礼申し上げます。

（県立新潟女子短期大学）

引用文献

(1)高野卓郎・中野友三・柿本因子・須田康之「保母養成に関する総合的研究Ⅲ―保育実習評価項目に関する考察―」比治山女子短期大学紀要第26号67―78頁　一九九二年

(2)石川清明・野本茂夫・宮崎豊「通年教育実習の成績評価について(1)～(6)」日本保育学会第48～53回大会発表論文集　一九九五～二〇〇〇年

(3)小川博久「教育実践学のフィールド・ワークとしての教育実習」東京学芸大学教育実習研究指導センター研究紀要第20集19―34頁　一九九六年

(4)江口裕子・糸静子・豊永家壽子・坂口りつ子「保育所・幼稚園における実習指導の実態と課題（Ⅰ）（Ⅱ）」日本保育学会第46回大会発表論文集172―175頁　一九九三年

手づくり活動の楽しさ すばらしさ(9)

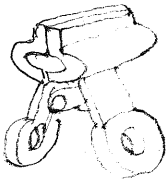
浜本昌宏

なんでも車にしてみよう

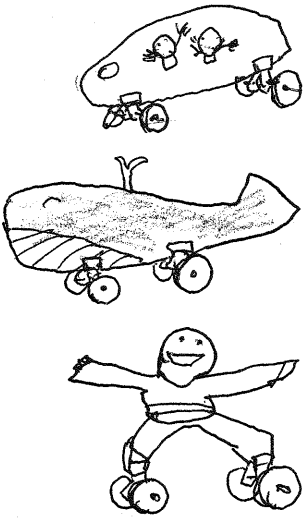
目玉クリップがあれば、容易にうごく車が出来て、遊べます。

サンプル作品をもとに、なんでも車に出来ることを示し、さらに、クリップの穴に竹串の車軸を通すことで車輪が良く回ることを、体験的に理解するのが良いでしょう。

こんな車があったら面白いなあ、というイメージや、アイデアからその形を厚紙に描き、ハサミで形を切り取っても良いし、そこにある形に車輪をつけて車にすることも出来ます。車輪はコンパスで円を描きハサミで切り取ります。貼り重ね厚くするのが良いでしょう。



用意するもの　目玉クリップ（格安店で販売）　木工用速乾ノリ　厚紙　ハサミ　竹串　絵の具など



傾斜しているところで転がしたり、帆を作り、後ろからうちわであおいで、走らせたり、色フェルトペンなどで飾りを描くなど出来ます。

（元三重大学）

恐竜の作り方

高橋　陽子

年長になっての五月。仲良し四（＋α）人組の男児たちは、恐竜の本に夢中だった。恐竜の本といっても、図鑑。保育室には二冊しかない。たくさんの本が備わっている保健室からも借りてきて、長方形の机を二個つなげてあるところに広げて見ている。借りてくる、ということでは子どもたちの方がよくわかっていて、「保健室に、もっとあった」ときちんとわかって取りに行く。恐竜の本に限ることではない。ブームになっているのは妖怪や昔話系の本。恥ずかしながら、私はブームということを知らなくて、誰かが保健室から借りてきて、保育室にそのままになっているのに気づかずにいて、他のクラスの子どもたちに大変迷惑をかけてしまったこともある。ようするに、他のクラスの子は、当然保健室に行けば妖怪・昔話の本に出会えると思って行く。いくら探してもない、のであるから、どんな思いをし

ていたことか。

毎年必ず恐竜に興味を抱く子どもたちがいる。大恐竜展がある年には、「何回もせがまれて行ってきました」という保護者の報告を受けることもある。家庭では「恐竜、恐竜」と言っているだろうに、幼稚園ではあまり言わない子どももいるし、一人で恐竜の図鑑をじっくり見ている子どももいる。

恐竜に対する興味や思いをどのような形に表現するかは、子どもによって違う。が、どう表現すると子どもの興味を損なわずに、興味のある子ども同士、又「知っている」程度のレベルの子どもにでも、共有できるものになるかしらと、悩むところである。子どもたちの興味のままにこちらが見ていることも必要とは思う。ただ、せっかくの知識を個人や仲間内だけには留まらせずに、できたら発信源になって欲しい。又、発信することで、恐竜には興味はあるけれどいつも遊んでいる人ではないからという理由で離れたところから見ている人にも、一緒に発信源になってもらいたい、それが、仲間関係を広げることにつながって欲しい、などと考えたりする。

が、恐竜というキャラクターは「これ知ってる」「見たことがある」から「草食だ」「肉食だ」という辺りの話は盛り上がるが、それぞれが話すだけになる場合が多い。子どもの遊びは、年長児になると、話から始まることも多くなるが、話の先に実際にからだを動かしたり、何か作ったりという行為が伴わないと、しぼんでしまうものである。図鑑を見ながら会話する仲良しグループの子どもたちは、どうなっていくのだろう、私はどう関わっていこうかと、いつもながら思案していた。

そのグループとはあまり遊ば

ないKくんとそのグループに関心のあるMくんが、図鑑を横から覗いて恐竜の絵を描き始めた。紙は、普段子どもたちが案外自由に使える八つ切りを半分にした大きさの画用紙である。グループの子どもたちも「紙だ！」という誰からともない声に動かされて、紙を取りに行き描き始めた。

実際の恐竜は十階建てのマンション以上に大きいものもいる。八つ切りの半分ではとうてい収まるはずがない。が、子どもたちは図鑑を見て、自分なりに描き写している。図鑑の中の恐竜であれば、その大きさの画用紙でもいい。また、何度も失敗する。こちらが見ると、なかなかいいじゃない、というものでも「失敗、失敗」と言って、新しい紙にまた描き始める。失敗作は時にはくしゃくしゃと、丸められてしまうこともあるので、あまり大きい紙でなくていい、ともいえる。何とかお気に入りにできたものを、見せに来てくれた。そこで、「立つようにもできるけど」と言ってみる。「する、する」とはさみを持ってくる。子どもが切り取ったものを持ってきて、私が裏に支えをつけて、そっと立たせる。

立つことで命を吹き込まれたように見えたのだろう、うまく描けない子どもが「描いて」とやってきた。一つ描けば次々に描いて、と来ることは百も承知であった。でも、同じように一人が一つ持つことで何かが始まるかもしれないと考えた。また、このクラスは四月から担任していて、このグループとはなかなか接点を持てないできた。大人より友だちとの関係を優先するHくんが私を頼ってきてくれた。これらが私の頭に一度に思い浮かび、「どれを描くの？」と聞いていた。その恐竜の枠を描くことにした。色を塗ったり切ったりすることは子どもの手で。私が描けば、どんな色の塗り方であっても本物らしく見えてくるようで、想像の通り「これを、描いて」という声が続いた。「〇〇くんは、持ってい

るでしょう?」と言えば「ぼくはまだ描いてもらっていない」と言われ「一つ描いた人はそれで遊んで欲しいのだけど?」と言えば「○○くんと同じ恐竜が欲しい」「まだ肉食しかない、草食もいたはずだから」と言われ、そう思うのは当然だよね、と思いながらもどこかで切らなければいけなくなると焦りもある。

Kくんや Mくんと仲良しグループは、同じ空間で同じものを作っていても直接会話することは殆どない。それでも、作ることに関してはお互いに影響し合っているのは明らかであった。作ることに追われながら次の展開を考えてみても、恐竜の世界を作って、そこで動かしながら遊ぶ、程度しか思いつかなかった。しかし今は、子どもたちの気持ちはたくさん自分のものが欲しい、ということなんだ、と自分に言い聞かせたりしていた。

恐竜の支えであるが、思いつきでその辺にあった残り紙を使ったので、立つのもあればだましだましでやっと立つものもある。何年幼稚園の先生をしているんだ、と自分で情けなくなっても、あとのまつり。「先生、すぐ倒れるよ」と訴えられる。それを直しながら、線を描き、新たな支えをつける。私があまりにもたもたしていると子どもの方が心得ていて、自分で支えを作りつけるようになっていった。

さて、日を空けることがあっても、恐竜作りは続いた。水に住む恐竜もいたので、青いビニール袋を広げた。「水のこっちはこうなってるよ」とジェスチャーで土手があることを示すSくん。段ボールを持ってきて、やってみるがなかなかイメージに合わない。Sくんが「それでいい」と言わない限り仲間たちも頷かない。何とかそれらしきものができた。子どもたちは、水の上と地面とにそれぞれ恐竜を置く。私が肉食恐竜を持って草食恐竜を追いかけると、一緒に動かしてみるが私が離れると、恐竜遊び

は終わり、キャラクターごっこをするために外に出て行こうとしていた。キャラクターごっこなら、イメージを共有できからだをたくさん動かして遊べる。いつもの仲間関係の勾配の中で遊ぶことができる。そう思いながら見送った。

恐竜作りが始まってしばらくして、親子で遊ぶ日があった。土曜日に行うので父親が来る人が多い。父親にアイディアをもらって、何か盛り上がるようにできないか、と密かに楽しみにしていた。四人グループのうち三人までが父親であった。雨であったのと父親が来ることは滅多にないのとで、親子とも緊張していて何をしていいかわからない感じだった。「こういうのを子どもたちが作っているのですが、恐竜ワールドのように、何か工夫できないでしょうか」と声をかけてみた。子どもたちは恐竜の図鑑を持ってきて、描いてもらっていた。それを見て母親と来ていたKくんも隣に座る。父親たちは言われるままに描いてあげているが、Kくんは自分で描いていた。あとで聞いてみると「本人が自分で描きたいと言ったから」とのことだった。Sくんの父親に「恐竜が住んでいた世界を作ってみませんか?」と誘う。段ボールを持ってくると、ついたてのようにコの字に囲めるようにし、火山の絵を描く。大昔に存在したような木を作り立ててもくれた。

恐竜ワールドはできたが、そこにみんなが集まって何かが始まるということはなく、次々に恐竜だけが増えていった。Kくんは、自分の作りたいものが出来上がると、違うことをしに行った。「作ってみませんか?」と声をかけたために、親子の時間を制約してしまったかもしれないと自責の思いだった。とともに、父親でさえ、恐竜を作りそこで遊ぶことは難しいんだな、三人の子どもたちの関係に入り込めないものがあるんだな、ということも感じてい

た。

親子で遊ぶ日以降も、子どもたちは見て、描く日が続いた。非常勤の先生に頼んでまで、描いてもらい自分のもの、を増やしていった。

私が以前務めていた園では、作品展という行事があった。日頃の個々の作品を保護者に見てもらうとともに、学年でテーマを決めてクラスごとに全員が関わって大きな作品を作り展示する日でもあった。年長組のテーマは、恐竜だった。立体的に、見栄えのする大きさに作るのである。子どもたちと、どの恐竜を作りたいか決める。その際には、クラス全員の前で図鑑を広げ、前もってこちらが考えておいた馴染みのあるものや特徴的なものについて説明する。その中から二体を選び作り上げていく。一度にはできないので、少しずつ関わるようにする。例えば、段ボール箱で骨組みを作るところは、○○グループさん。そこに、丸めた新聞紙をつける。全員が一、二個丸め、グループ毎に段ボール箱につけに来る。新聞紙をつけることで、ふくらみを持つ。その上に色が塗れるように白い紙を貼っていく、手や足をつける、顔を作る、など少しずつみんなで作るのだ。担任である私も、あとどの位で完成するのかの予測がつかなくなってしまうほど大変で、何とか恐竜らしきものになった時には疲れ切ってしまい、解放された嬉しさを感じたものだった。立体的であり、質感や大きさのわかるものとなったので、子どもたちには達成感があったとは思うが、記憶は定かではない。

今年担任になった仲良しグループの子どもたちにとっては、興味を持った恐竜をとことん描いて、自分のものにする楽しみがあるのだと思う。時々私に促されて父親たちと作った恐

竜ワールドで遊ぶこともあったが、入りきれないほどの数になった。恐竜の博物館のようにしてみようかと思うこともあったが、まだまだ描いていない恐竜がある、と作り続ける子どもたちを見ていると、満足していない気持ちのままでは友だちに発信する力は、本来持っている力を発揮しきれるほどにはならないよねと思い、声はかけないでいる。

一学期も終わりに近づいた。いつものグループ内でいざこざがあり気持ちが建て直せないでいた、恐竜が大好きという女児Nさんに「一緒にやってみる？」と声をかけた。少しはにかんだような表情ではあったが机に向かった。恐竜好きなだけあって、特徴を捉えて描いている。絵が上手いというわけではなかったが、本物らしく感じさせられたのだろう、描いて、と男児たちに言われる。一日かけてお願いに応えて描いてあげていた。翌日も、朝から机で図鑑を広げる男児たちの中にいる。しばらくしてから、NさんとHくんに「うちわを作ろう」と声をかけた（毎年夏休み前にうちわを作っている）。竹製のうちわに、和紙のちぎり絵で模様を描いていく。二人とも期を逃してやっていなかった。手先のことが好きではないHくんだったが、恐竜描きに多少閉口していたNさんが場所を移動したのについて行った。完成すると、違う遊びをしていた仲良しグループに戻っていったが、このまま夏休みになってしまうのがもったいないような感覚が私には残った。

終業式前日、作品を持ち帰る。仲良しグループの子どもたちもKくん、Mくんも、自分のもの、と確認しながら袋に入れていく。二学期、幼稚園が始まったらまた持ってくるのだろうか。今度はこちらの思いを伝えてみようか、もっと発信源になるように、もっと大勢が集えるようにと思っている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

幼児の教育　第一〇二巻（平成十五年）　総目録

◇第一号

ある日

巻頭言　保育に〝子どもの視点〟を　森上　史朗

子どもと出会う(1)　子どもにとっての保育室　岩田　純一

子どものいる風景(2)　今、子どもたちの　小林　美実

あそび場は……

障碍をもつ幼児の保育(6)　手を使うこと　その一　津守　真・津守　房江

生きもの共存の畝間から(9)　徳野　雅仁

日常生活の中のこころとからだ　宮田　敬一

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む(4)　安田　尚

つながりを生みだすもの・こと　伊集院理子

◇第二号

巻頭言　生活芸術が花開く―環境が保有する価値の探求から―　青木　久子

特集〈くさる〉

腐ることと慈しむ心　井原　成男

くさる　腐る　自然さ　鍋島　恵美

腐るのも大切　村田　容常

「生育」と「くさる」の共存へ　小宮山洋夫

障碍をもつ幼児の保育(7)　手を使うこと　その二　津守　真・津守　房江

TO・NI・KARAひろば　その六　嶺村　法子

生きもの共存の畝間から(10)　徳野　雅仁

三木成夫といのちの世界(五)　吉増　克實

私の体験した半世紀前の日本とアメリカの保育　亀髙　京子

実践の心を学ぶ　関口はつ江

◇第三号

ある日

巻頭言　いま、〝保育の世界〟が面白い　籔　光夫

子どもと出会う(2)　根をもつということ　岩田　純一

障碍をもつ幼児の保育(8)　手を使うこと　その三　津守　真・津守　房江

OMEPアジア・太平洋地域会議における北京の幼稚園訪問記　小川　清実

生きもの共存の畝間から(11)　徳野　雅仁

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む(5)　安田　尚

遊びを通して子どもの育ちを考える(5)　阿部　康子

立ち止まってみたら　桝田　正子

◇第四号

巻頭言　保育における〝におい〟を見直す　金田　利子

特集〈はずむ〉

からだがはずむ、心がはずむ　村田　芳子

はずむ心をつくる身体　鈴木みゆき

もののはずみでダンゴムシ協会　宮里　和則

はなまるエピソード、ポンポーン　すとうあさえ

生きもの共存の畝間から(12)　徳野　雅仁

ポジティブサポートの世界(1)　村田　愛

手づくり活動の楽しさすばらしさ(1)　浜本　昌宏

子どもと笑い(1)　今井　和子

ある日

障碍をもつ幼児の保育(9)　手を使うこと

その四　津守　真・津守　房江

ちょっとした緊張感から感じたこと　吉岡　晶子

◇第五号

巻頭言　助けよう　孤立する母親たち　岸井　勇雄

『森の幼稚園』人と出会う中で　宮里　暁美

考えたこと

ある日

子どもと出会う(3)

「スキンシップ」考　岩田　純一

せつな系植物楽　植物ぽろぽろ

第一葉　たんぽぽ　群馬　直美

手づくり活動の楽しさすばらしさ(2)　浜本　昌宏

障碍をもつ幼児の保育(10)

言葉のない子のコミュニケーション

津守　真・津守　房江・玉木喜美子

TO・NI・KARAひろば　その七　嶺村　法子

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む(6)　安田　尚

夏、それぞれの成長　藤津　麻里

◇第六号

巻頭言　蛇行の理由　吉村真理子

ポジティブサポートの世界(2)　村田　愛

子どものいる風景(3)　小林　美実

子どもと笑い(2)　今井　和子

ある日

障碍をもつ幼児の保育(11)

言葉のない子のコミュニケーション(2)

津守　真・津守　房江・玉木喜美子

絵本とともに　藤津　麻里

木と子どもと遊び　田中　千尋

手づくり活動の楽しさすばらしさ(3)　浜本　昌宏

床下　佐藤　寛子

◇第七号

ある日

特集〈こねる〉

思索の時間　加藤　喜道

土をこねて（？）巣をつくるハチ　高柳　芳恵

小麦粉粘土づくり　佐藤　寛子

「こねる」授業の面白さ　清水眞由美

手づくり活動の楽しさすばらしさ(4)　浜本　昌宏

幼小連携、幼保小連携を考える　酒井　朗
ひきつけられること、心を動かすこと　川﨑　徳子
障碍をもつ幼児の保育(12)
手を使う、マヒのある子の成長　津守　真・津守　房江
子どもと出会う(4)
ぼくの手が勝手にした　岩田　純一
TO・NI・KARAひろば　その八　嶺村　法子

◇第八号
巻頭言　絵本と子どもを見つづけて　佐々木宏子
障碍をもつ幼児の保育(13)
手を使うこと・遊び、描き、造る　津守　真・津守　房江
お化けやしき　清宮　聡子
せつな系植物楽　植物ぽろぽろ
第二葉　ひょうたん　群馬　直美
ポジティブサポートの世界(3)　村田　愛
スリランカの保育者とともに　馬場　繁子
手づくり活動の楽しさすばらしさ(5)　浜本　昌宏
子どもとの日々のひとり言　菊地　知子
特集〈緑蔭図書紹介〉
あなたがいるってことだけで　倉持　清美
『心理学ってどんなもの』
『ソラリスの陽のもとに』　山本　政人
読書・無限に広がる想像の世界が
そこに　安西　三恵
三木成夫著『胎児の世界』第Ⅱ章より　磯貝　文男

◇第九号
巻頭言　保育評価の功罪　森上　史朗
「遊び」雑感　遊びの演出者は大自然　吉村真理子
生活から自然な学びへ　フレネ学校の
幼児たち　猶原　和子
子どもと出会う(5)
子どもの時間　岩田　純一
手づくり活動の楽しさすばらしさ(6)　浜本　昌宏
障碍をもつ幼児の保育(14)　目―出会いの
ときに　津守　真・津守　房江
ある日
ニューヨークに住む日本のこどもたち　鍋島　恵美
TO・NI・KARAひろば　その九　嶺村　法子
自分の保育を振り返って　堀川　仁美

◇第十号
巻頭言　教育の陰にある教育　中沢　和子
ポジティブサポートの世界(4)　村田　愛
手づくり活動の楽しさすばらしさ(7)　浜本　昌宏
障碍をもつ幼児の保育(15)　見ること
その二　津守　真・津守　房江
子どものいる風景(4)　小林　美実
ある日
スノーボードの遊びから　上坂元絵里
特集〈手〉
手と手、夢想　菊地　知子
手当てについて　酒井　朋子
神様からの贈り物・「手」　安西　三恵

かしこい〝手〟　永野むつみ
「手」をとおして、からだのなかに
残る記憶　渡辺　満美

◇第十一号
巻頭言　なぜ、今、幼・保・小の連携か
―「子どもらしさ」の回復―　佐伯　胖
「遊び」雑感　その二　吉村真理子
子ども理解の視点を広げていくために　清原　規子
障碍をもつ幼児の保育(16)　見ること
その三　津守　真・津守　房江
せつな系植物楽　植物ぽろぽろ
第三葉　にんじん　群馬　直美
「くり返し」のおもしろさ　田辺　敦子
ある日
子どもと出会う(6)　聴くということ
岩田　純一
TO・NI・KARAひろば　その十
嶺村　法子
手づくり活動の楽しさすばらしさ(8)
浜本　昌宏
保育の見なおし三年目　入江　礼子

◇第十二号
巻頭言　保育における進歩とは
金田　利子
乳幼児期の「食」を考える(1)　小川　清実
ポジティブサポートの世界(5)　村田　愛
障碍をもつ幼児の保育(17)　ちょっと
立ち止まって　津守　真・津守　房江
ロンドンの子どもたち　清原　規子
ある日
保育を積み重ねること　関口はつ江
保育実習生として成長していく時に
大切なこと　梅田　優子
手づくり活動の楽しさすばらしさ(9)
浜本　昌宏
恐竜の作り方　高橋　陽子
幼児の教育第一〇二巻総目録

幼児の教育
第一〇二巻　第十二号
（二〇〇三年十二月号）
定価五五〇円（本体五二四円）
発行　平成十五年十二月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112―8610 東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108―8620 東京都港区三田五―二二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113―8611 東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇
☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

編集委員　森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（大妻女子大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

最新刊

21世紀保育ブックス⑭

「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ

葛藤を通した子どもたちの育ち

今井和子・神長美津子　共著

今、家庭で「子どもの発達に見合った子育て」がなされることが緊急の課題であり、なかでもとりわけ子どもたちの「心を育てる」ことが必要とされています。人間としての「核」が形成される乳幼児期の子どもの内面の育ちを、豊富な事例をもとに探ります。

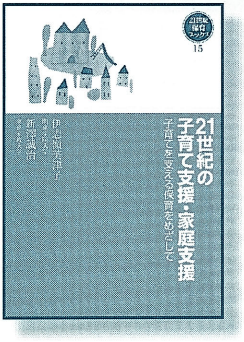
B6判　216頁　定価：本体1,200円＋税

21世紀保育ブックス⑮

21世紀の子育て支援・家庭支援

子育てを支える保育をめざして

伊志嶺美津子・新澤誠治　共著



保育者には、子どもを保育するだけではなく、親を支えて子どもの発達を保障し、家庭を支援していく力量が必要になってきました。本書では、カナダの事例や動き出した子ども家庭支援センターの取り組みを紹介。これからの子育て支援、家庭支援について考えます。

B6判　188頁　定価：本体1,200円＋税

既刊本

①新しい教育要領・保育指針のすべて　森上史朗　著
②新時代の保育サービス　柏女霊峰・山本真美　共著
③カウンセリングマインドの探究　柴崎正行・田代和美　共著
④子ども虐待の理解と対応　庄司順一　著
⑤知的好奇心を育てる保育　無藤　隆　著
⑥保育者の「出番」を考える　吉村真理子　著
⑦地方自治体の保育への取り組み　山本真美・尾木まり　共著
⑧乳幼児期の「心の教育」を考える　阿部和子　著
⑨自由保育とは何か　立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子　共著
⑩保育者が出会う発達問題　大場幸夫・前原　寛　共著
⑪保護者の要望をどう受けとめるか　小笠原文孝　著
⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る　吉田正幸　著
⑬子どもの健康を考える　巷野悟郎　著

〈以下続刊〉

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一〇二巻　第十二号　平成十五年十二月一日（毎月一回発行）昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可

保育所に求められる説明責任・情報公開はどんなこと？

平成15年スタートの第三者評価をふまえた解説が、現場の疑問に答えます！

最新刊

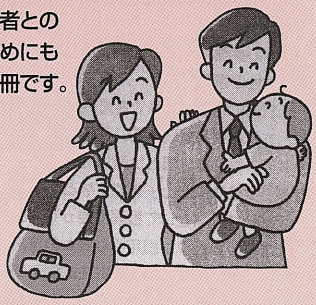
園の説明責任・第三者評価対応

入園のしおり

作成のポイントと実例

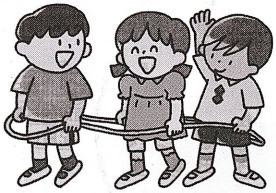
小笠原文孝（おがさわら　ふみたか）著

春、保護者に配る入園のしおり（園案内）。どのように構成すれば保護者に伝わりやすくなるでしょうか。その作り方を、実例とポイントを併記しながら解説します。また、家庭での育児の工夫やアイデアなどを盛り込むこともアドバイス。保護者との連携を図るためにも一助となる１冊です。



内容・構成

- 第一章　施設概要～作成のポイントと実例
- 第二章　保育の内容～作成のポイントと実例
- 第三章　保健と健康管理～作成のポイントと実例
- 第四章　家庭との連携～作成のポイントと実例
- 第五章　準備物の案内～作成のポイントと実例
- 第六章　防災と安全管理～作成のポイントと実例
- 第七章　法人の概略～作成のポイントと実例
- 第八章　資料～作成のポイントと実例
- 資料／第三者評価関連



Ａ４判　136頁　定価：本体2,200円＋税

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部（03）5395-6608にお問い合わせください。

定価　五五〇円（本体五一四円）☆